

地域の経済発展にかんする年報が発行され、本号は18冊目にあたる。ところが1957年以来、この年報は2部に分かれ、第1部は長期的動向分析のための特定の重要問題を取りあげ、第2部は過去1カ年の経済発展なる短期的動向分析をとりあつかう仕組みになっている。

この長期的分析として、とりあげた特定問題はつぎのようであって、年次分析とあいならんでの、ECAFE地域経済動向の重要な文献である。すなわち、

- 1957: Postwar problems of economic development
- 1958: Review of postwar industrialization
- 1959: Foreign trade of ECAFE primary exporting countries
- 1960: Public finance in the postwar period
- 1961: Economic growth of ECAFE countries
- 1962: Asia's trade with western Europe
- 1963: Import substitution and export diversification
- 1964: Economic development and the role of agricultural sector

本号をとくに紹介したいゆえんは、いうまでもなくこの特集の「経済発展と農業部門の役割」にある。これは、ECAFE地域を対象として、この重要な問題についての、はじめての総合的な分析である。

第1章は、一般的な部門関係である。経済成長過程における部門均衡、ECAFE諸国における農業の相対的地位（雇傭・生産性・所得・輸出の4面においての）、最近の経済成長と構造変化（農業部門と非農業部門の相対的成長・農業および製造工業の最近の傾向・1952/54～1961/63間の構造変化）、産業部門間の関係（農業部門の投入産出関係・部門間の需要創出・農業部門の需要創出）をとりあつかう。

第2章は、経済発展の戦略としての農業発展、食糧供給と工業化（食糧の供給と必要・食糧の供給と需要・食糧供給の均衡とそれが工業化のためにもつ重要性・経済発展のための過剰食糧輸入の使用）、農業部門での貯蓄による経済発展への融資、農産物輸出と経済発展の関係、工業化のための農村労働力の供給（農村における失業と不完全雇傭・農業部門から工業部門への労働力の供給・工業部門の農業労働力にたいする需要）、農産工業と農業必需品製造工業（農産工業・農業必需品製造工業とくに肥料工業・両工業の経済発展における役割）および農業発展の問題と政策（土地改

革によるインセンティブ・農産物商品化によるインセンティブ・消費と節約との関係・農業技術の変化）が、とりあげられる。

第3章は個々の国についてのケース・スタディズ。食糧問題にかんしては、インド・インドネシア・パキスタン・韓国、農業と工業との関係を、台湾・オーストラリア・ニュージーランドについて分析する。最後に日本の経済発展における農業の役割がとりあげられている。

この内容から明らかなように、経済発展における農業の役割についての問題点が、十分あますところなく指摘され、しかも、これらの問題点がECAFE地域の諸国の統計でもって現実的に説明されている。まことに、「ECAFEの業績なればこそ」という感じが深い。経済発展における農業を論じたすぐれた文献である。

ただ、全体としての欠点は、ECAFE地域の各国の経済構造や経済成長がひじょうにちがうにもかかわらず、（いいかえると、たんに量的な較差だけでなく、きわめて異質的であるにもかかわらず、）これを主として統計的・数字的資料でもって、一貫的に説明しようとしたことにある。しかし、これはなにも、本書や、またその他のECAFEの出版物だけにかぎらず、ECAFEの組織や活動の本質的なものについて批判されるべき点である。  
(本岡 武)

E. K. Fisk: *Studies in the Rural Economy of South East Asia*. Eastern Universities Press Ltd. for University of London Press Ltd., Singapore, 1964. 108 p.

著者Fisk氏は、現在、Australian National Universityに属するResearch School of Pacific Studiesの経済学Senior Fellowである。かれは、1947年から1960年にかけて、最初はMalayan Civil Service、つづいてColombo Plan Economistとして、マラヤに在勤、主にMalayan Rural and Industrial Development Authorityに勤務、そこの初代の経済計画部長であった。その間はもちろん、オーストラリアでの研究生活に移ってからも、つぎつぎ論文を発表、マラヤの農業経済研究についての第1人者だ。

その既発表の論文のいくつかをまとめたものが、本書「東南アジアの農村経済研究」である。著者の学識・経験からだけでなく、こうした文献がきわめて少な

い実状からしても、本書の刊行は、東南アジアの農業経済問題研究のうえに喜ばしい。

本書が強調しているのは、序説(第1章)に明らかのように、欧米の農業経済学理論は東南アジアの農民経済に適応しがたい面が多いから、この農民経済の実態から理論が再構成され、研究分析方法が再検討されなければならないとの点につきる。

これを受けて、第2章は欧米経済学者と東南アジア農村経済と題し、“grass-roots” level, すなわち、零細な独立農民経営者段階における一般的な問題点の所在を指摘する。とくに、小規模仲介業者、農村金融、販売加工サービスなどの問題がとりあげられる。

第3章はマラヤで農業開発政策として高いプライオリティの与えられている land settlement program, 第4章は小規模農民経営における機械化の問題をとりあつかう。いずれも実態調査の資料にもとづく。

第5章は既存の小規模なゴム栽培経営地域の実態分析であり、とくに農業経済学専攻学生がいかに調査を進めうるかとの具体的事例を示そうとする。

第6章は、マラヤ農業の重要問題である米作小規模経営をとりあつかう。また、同時にこの小規模経営研究に役立つ分析方法を示す。

最後の第7章で、マラヤが直面する最も深刻な複合社会の開発問題にとりくみ、national level の研究の方法が示される。ここでは、農村経済の研究が、いかにこのマラヤの基本的な問題の解決に貢献しうるかを、具体的データにもとづき、強調する。

この内容からうなずけるように、本書は、東南アジアの農村経済の研究というよりも、むしろマラヤ農村経済の研究というべきである。もっとも、ここに示された分析方法や思考体系は、マラヤ以外の東南アジア諸国にも適用されうるだろう。それにしても、諸国間の農業経済の問題は、あまりにも違いすぎるのではないかと思われる。

わたくしは、むしろ分析方法よりも、本書がマラヤ農業経済の基本的な問題点をあますところなくとりあげ、しかも実態分析によって、それを裏づけていることを高く評価する。マラヤの農業経済学教育上、副教科書であることをねらっていて本書のひとつの目的は、十分に達せられていると思う。また、マラヤ農業経済問題の研究のための、入門的な役割をはたすものとして、必読のものだと考えられる。(本岡 武)

K. G. Tregonning: *A History of Modern Malaya*. University of London Press, Singapore, 1964. 339 p.

著者はオーストラリア人で、オックスフォード大学に学び、1953年以来シンガポールにあってマレーシアの歴史研究に従事、すでに数冊の書を著わし、現在シンガポール大学のラッフルズ歴史教授である。1960年には *Journal of South-East Asian History* を創刊し、その編者となって現在に至っており、学者として既に定評がある。

本書はマラヤ近代史の概説書で、著者が編する *History of Modern South-East Asia Series* の第1冊として刊行されたものであり、かつて著者がマラヤ大学(現在のシンガポール大学)の史学科で行なった講義内容をその中核としたものという。

すべて15章より成り、18世紀までの部分を扱った最初の3章を除く残り12章は、19~20世紀時代にあてられ、最後の章では merdeka (独立) 以後1963年までについて述べ、題名にふさわしい内容である。(もっとも著者は15世紀のマラッカ王国の創立とイスラム教の受容をもって近代マラヤの成立とみなしているが。)

ところで本書の最も特色とするところは何かというのに、それはマラヤの側からみたマラヤ史であるという点であろう。従来のマラヤ史は植民地支配者からみたマラヤ史か、そうでないまでもマラヤ外からみたマラヤ史であった。Swettenham や Winstedt などの戦前のマラヤ史はもとより、マラヤ独立後の著作である J. S. Jessey: *History of Malaya, 1400-1959*, 1961. や G. Kennedy, M. A.: *A History of Malaya, A D. 1400-1959*, 1962, できえも、このような見方から脱脚していない。それに対して本書は徹頭徹尾マラヤを中心に、マラヤ側からみたマラヤ史を書き綴っている。

中でも著者が第3章において、従来のほとんどの史家が16~18世紀のマラヤを、ポルトガル又はオランダの支配時代としているのを根本的な誤りだとして斥け、マラヤの側からみる限り、この時代はむしろ「アチェー・ミナンカバウ・ブギの時代」とすべきだと述べているのや、第8章において19世紀末から20世紀初めにかけてのマラヤ史を説き、連邦の成立や、シャム属北